



「鯉が窪湿原」には380種類を超える植物が自生

芸備線ストロール⑳

「野馳駅」新見駅

岡山区間を振り返って

芸備線ストロールで、岡山区間を足踏み入れたのは、昨年令和4年10月だった。いつものように東城駅まで車で行って、駅前には降りて歩き、次の野馳駅で降り、駅周辺を散策したあとで、歩いて車のある駅まで戻る。便数の乏しいローカル線で考えた取材のルールである。

野馳駅には、開業当初の木造の駅舎が残っている。その事務室部分に地元の妹尾タクシーが入居の窓口業務も受託している。行きたい場所があった。鯉が窪湿原、次の矢神駅の方が近いが、11月4月中旬まで冬季休業期間に入ってしまう。「歩くときのぐらいかかりますか?」、「1時間半はかか

りますよ」。タクシーに乗せてもらうことにした。約20分で鯉が窪湿原に到着、西の尾瀬沼と呼ばれ380種類を超える植物が自生、「鯉が窪湿生植物群落」として国の天然記念物に指定されている。花の季節は過ぎていたが、秋の湿原の遊歩道をのんびり散歩できた。

東城駅までの歩きでの帰路、県境に「牧水二本松公園」がある。明治40年の夏、早稲田大学の学生だった若山牧水は、郷里宮崎県への帰途、中国山地を旅して当地を訪れている。そのとき詠んだ二首の歌碑と、宿泊した熊谷屋の建物が公園内に復元されている。二本松峠は備中と備後の国境で、「御境杭木（おさかいこうぼく）」という木製の門柱が立てられている。古代日本には、畿内の大和、九州の筑紫、山陰の出雲と並ぶ四大王国の吉備国が存在した。大和朝廷の時代となり、吉備国の勢力を弱めるために、備前、備中、備後の国に分割された。

芸備線は、大正4年（1915年）に東広島―志和地駅（三次市内）間を結ぶ私鉄「芸備鉄道」が開業したのが始まり。安芸の「芸」と備後の「備」、今の芸備線は、備中の「備」でもある。翌11月は矢神駅を訪問。開業当初の木造駅舎が残っているが、事務室の部分が取り壊されて、壁がベニアの合板で覆われている。外装が屋根も含めてくすんだ紅色をしているのは、ベンガラを塗装しているのだろう。銅鉾の副産物である酸化第二鉄を主成分とする赤色顔料で、高梁市の吹屋地区が生産地として有名だ。翌12月は市岡駅。昭和28年に開業した駅で、木造駅舎も現代的なデザイン。駅前の国



道182号線を矢神駅方面に戻ると「日尾山八幡神社参道」の看板が立っている。右折すると石造りの鳥居の前に出る。石段を登ると芸備線の上に出て、東西に延びる線路を見渡すことができる。

その先の石段は、軽く50段を超えている。登り切った先が「憩の丘公園」、大きな屋根のある休憩所が設けられている。その公園を通り抜けると、両側をフェンスで囲まれた陸橋。その「八幡橋」を渡った先の小路を進むと、ようやく八幡神社の前に出る。この神社の参道は、国道182号線から始まって、芸備線の上を超え、

さらに中国縦貫道路の上空を歩いて渡るのだ。

翌年2月、坂根駅を訪問した。駅舎はなく、透明なパネルで囲まれた簡易な待合室があるだけで、小雪交じりの寒風が身に凍みた。駅の前方が中国縦貫道路の強大な壁に遮られていて、隠れ里のような雰囲気がある空間だった。

駅の近くにある疫清神社に参拝した。口承では、遠い昔に疫病がはやつたときに地域住民の力で創建された神社で、行疫神である牛頭大王をお祀りしている。コロナ禍の収束を懇ろに祈願した。

翌3月は、備中神代駅。路線図上では芸備線の終点(起点)となる駅だが、運転系統上は新見駅が広島側から見れば終着駅である。備中神代は伯備線も乗り入れる駅で、それぞれのホームを行き来する跨線橋がある。

駅舎はすっかり簡素化されて、箱型の待合室に二人掛けのベンチがあるだけだ。昔の木造駅舎は、映画の「八墓村」(1977年)での撮影にも使われて、備後庄原の駅舎にも似たどっしりした建物だった。坂根駅への帰り、「夢すき公園」に立ち寄った。日本一の「親子孫水車」が有名で、「紙の館」では和紙の紙漉き体験ができる。

翌6月に、終点の新見駅を訪問。新見藩の歴史や文化が残る御殿町の町歩きツアーに参加した。「新見御殿町まち歩きガイドの会」のメンバーの引率で、旧家の蔵の中にまで入って、秘蔵品を鑑賞できる。新しい建物にも、なまこ壁を模したタイルが外装に使われていて、古里への敬慕の想いが伺われる。

お世話になったボランティアガイドの竹井慎さんから、先月号の間違いを一つ、指摘していただいた。城山(じょうやま)公園に新見藩の陣屋(御殿)があったと書いたが、陣屋があったのは現在の新見北高校と思誠小学校が建っている場所。城山という名前の先入観で、確認せずに書いてしまった。城山の頂上には上水道の記念碑が建っているが、城址、あるいは陣屋に関する遺構や石碑、解説板等は何も無かったことを、今さらのように思い出した。

翌4月は桜巡り取材、布原駅を訪れたのは5月だった。路線図上は伯備線の駅であるが、通過するだけで停車しない。芸備線の列車だけが乗降車出来る。当然、運行ダイヤも芸備線だけ。

布原駅は本当の秘境駅だ。駅舎はおろか、待合室やベンチさえない。ホームからは、近くを流れる西川(写真上)の景色が見渡せる。雨宿りする場所もなく、隣にトトロやカップの三平が立っていても違和感のない、自然の中の駅である。

しかし、城山公園では田山花袋の「蒲団」の碑(写真下)を見つけた。ヒロインである横山芳子の故郷が新見なのである。芳子のモデルの女流文学者、岡田美知代は晩年を庄原市川北町で過ごしている。芸備線を乗り継いで、そのつながりを発見できたことが嬉しかった。

岡山の地を歩いて感じたのは、歴史や文化を大切にする民度の高さ。そういう意味では、東城も岡山の文化圏だろうか。天候にも恵まれて、さすがに「晴れの国」である。

「ある程の菊なげ入れよ棺の中」

高柴順紀（菊栽培農家）

どなたの葬儀に行っても思いだしてしまふのが表題の句です。漱石のよく知られた句ですが、お別れの際にそつと菊花を添えてあげることこの花を栽培していることの充足感を何時も感じます。

でも中国の長い歴史の中で詩人たちは霜枯れた晩秋を凜として咲き続ける菊に高潔なイメージを持っていました。決して葬儀の花だなんて考えもしなかったのに、何故か日本では葬儀花の印象があまりにも強くなってしまったことは疑いのない事実です。だから菊を葬儀花にしたきっかけは漱石先生のこの句に違いないと意地悪く思っている。

それでも私が菊栽培を始めた昭和四十年代はまだまだ生け花のお師匠さんが花需要の大半を引っ張っていた時代でした。全国各地の花市場も零細な個人経営でのんびりとした雰囲気（せ）っており、広島の花市場ではセリ時にも関わらず数学の幾何の問題集を持参して解いている名物花屋さんが居ました。当時はお花

のお師匠さんを三、四人も抱えていれば食べていけた羨ましい花屋さん達でしたから、葬儀花の感覚なんて誰も持っていなかったと思います。

でもその後は高度経済成長とともに菊が、それも白菊が花市場を席卷するようになったのです。それは厳粛な葬儀場を飾るにはなくてはならぬ花としての地位を確立したのでした。同時に花屋さんの華やかな店頭には菊を置かなくなるという妙な現象が生じてしまいました。

ともあれ大量の菊をさばくにはセリ人の声量がポイントで、ガラガラ声の方が普通でした。しかしオランダの競り方法は違うらしいぞ、行ってみようやの話となり田舎の小さな菊生産組合ですが海外旅行となりました。かつて蘭学者の青木昆陽は『和蘭話訳』で次のような例文を挙げています。私にとってこの訳が正しいかどうか確かめる良い機会となりました。

Ik ga uijt om Bloemen te kijken
私儀花ヲ見シタメニ出向可申



さてどんな「競り」でも購入者が相手の顔色を窺いながら値を付けていくので時間がかかります。セリ人も手数料収入を目的としていますから高値が付くまで大声で頑張るという訳です。でもオランダのセリは真逆の「逆競り」方式で、セリ場の正面に時計盤（右写真）がありました。最初に高値を設定しておき時計の針を下げていくのです。だから一番先に時計を止めた人が買い手となる仕組みなので時間はかかりません。正に「機械競り」は人の情感に訴えるところのないオランダ人の合理主義の結晶だと感じました。とにかく青木昆陽を連れて行って見せたい阿蘭陀の花風景でした。江戸時代とは言え彼の訳は素晴らしいと現地の通訳さんが驚いていました。でも我々一行はあまりにも先端を行くオランダの花卉園芸にショックを受けて、しょんぼりと帰途に就いたというのが本

当のところでした。

ここで最初に戻りますが、漱石は随筆『ガラス戸の中』でこの句を詠んだ想い出を書いています。相手は若くして亡くなった女流作家の大塚楠緒子でした。出会いの時の印象が強烈だったのでしようか。文章から見ると想い出に残るような飛び切り美しい方だったようです。『・私は病院で「ある程の菊なげ入れよ棺の中」という手向けの句を楠緒さんのために詠んだ。』とあります。楠緒子の作品を新聞掲載や出版など出来るよう手配もしてるようで、友人の奥様だからというよりも彼女の才能を認めていたのでしょう。彼女が私淑していたのは漱石だったと言われています。

実は私にはこの句を手向けたい方がありました。大阪の花市場で東城の菊を長年声を張り上げて競ってくられていたセリ人、ガラガラ声のOさんです。職業病であろうか喉の病気で若くして亡くなってしまったのです。ご遺族から聞いた話です。意識が薄れていく中での最後の言葉は「カンバイ（完売）」。

《参考文献》『蘭学事始とその時代』片桐一男著（日本放送出版協会）

文学探訪

庄原と「百三の青春」⑦

お絹さんを巡る懊悩―百三の女性観の要の人

音谷健郎

神田晴子こと「お絹さん」は、倉田百三の女性観の要になる人ではないでしょうか。後年、お絹さんをはじめ複数の女性をそばに住ませ、交流した百三の汎愛主義は、多くの誤解を生みましたが、百三は常に自分には正直だったと思います。

お絹さんとの出会いは、脊椎カリエスの病名をつけられて、広島病院の病床に伏せているときでした。大正4（1915）年1月のこと。

百三の病状を心配したアライアン



祈るお絹さん。病床で出合いを悩む百三（岩崎健二作画のコミック『倉田百三』から）



お絹さんと一緒の百三。息子の地三、母親ルイも（福岡金亀寺で）

ス教会は、早くから庄原に伝道師が入り、百三も幼い頃から親しんでいました。別の病院の看護婦長でもあるお絹さんが、百三の枕元で賛美歌を歌い、祈るのでした。

「あなたのような純な、まじめな、女らしい人にあえば、私の心の底の善い素質が呼び醒（さ）まされます」と、百三は感激を綴ります。一高時代に失恋したH・H（逸見久子）への痛苦が、わだかまっているような文面です。

これは、一高の校友誌にお絹さんとの出会いの10ヶ月後（大正4年11月付け）に「過失―お絹さんへの手紙」として登場します。「あなたの手紙がとどきました。私の恐れていたものがついにきたと想いました」と始まります。

「私はこのような手紙を書かせるようにあなたにしむけたのでしょうか。私はそうしてはならないと、いつも思っていました」と。純情なお絹さんを誘惑してでもいるような、書きっぷりです。

「あなたと逢って私は鳩のような、小鳥のような―それは私の心にながとどざされたところのやさしい情緒をふるさとのおとずれでも聞くように思いました」。百三は何か、癒やされているようでもあります。

ここからは、一高の親しい友人である久保正夫、久保謙の2人に出した手紙を歳月を追って編集した『青春の息の痕（あと）』（昭和13年刊行）で迎ってみます。

こちらにお絹さんが登場するのは、先の「過失」よりずっと早く、ほぼ入院直後の大正4年2月12日付けで、広島病院から久保正夫宛に発信した手紙です。

「その女はクリスチャンで愛らしい単純な信心な女です」と紹介しています。

「お絹さんは私に、初対面の日からよく触れました。私はその女の苦痛を経て来た半生、そしてそれにも拘はらずのんびりとした単純な、そして深い高尚な思想に感動することが出来る心をめました」と。

お絹さんは、5日来て、10日ほど働きに回り、また5日ばかり来るのでした。

「真面目な熱い祈祷に感動させられ、どんなに久しぶりに幸福な生活に味はったでせう」と。手紙は「私はだんだん愛の人となるやうです」と結んでいます。

それから、何度かの手術、世間の眼、夢中になるばかりのお絹さんとの葛藤。2ヶ月後の九州・別府からの久



倉田家の墓（庄原市西本町）。石段を上った砂利道の向こうに出入口の鉄柵がある



百三の墓石には「寂々西行水楽居士」と自分で用意した戒名が刻まれています

お絹さんとは付かず離れずです。百三は、「（お絹さんが）美しくないので、幸抱して、私の一生の伴侶にしてやらう思います」と言ってみたり、「私は一生娶（めと）らず、側に置いて共棲を続ける気です」と、迷いに迷っています。

4月、久保謙にこんな手紙を出しています。「お絹さんは東京のやうな、華やかな都に行くのは、

お絹さんとは付かず離れずです。百三は、「（お絹さんが）美しくないので、幸抱して、私の一生の伴侶にしてやらう思います」と言ってみたり、「私は一生娶（めと）らず、側に置いて共棲を続ける気です」と、迷いに迷っています。

4月、久保謙にこんな手紙を出しています。「お絹さんは東京のやうな、華やかな都に行くのは、

次回は「百三が憧れた女性たち——幼少期を中心に」を取り上げます。

保謙宛ての手紙では、心の迷いを打ち明けています。「恥かしながら私は女は最も大きな虚栄の源になります。私はいつそ結婚してしまはうかとも思ひます。けれど結婚に関しては熟考を要する問題は他に沢山あります」と。百三の優しさと虚栄が入り交じった「不決断」の女性観がうかがえます。

転地療養先の別府に現れたお絹さんは、「帰りたくない」と泣きながら舟に乗って去りました。

百三は、お絹さんとの葛藤を通じて、信仰についての悩みを深めます。「天の使のやうな生活を傷つけないやうな女性の愛し方があるまいか」と

考え悩むのです。「私は肉体の交わりに伴ふ恥づべき、嫌ふべきエゴイスチッシュな意識を痛感します。若し私たちの魂が祝福されたる高き神来の純化に達するならば、肉体の交わりなくとも、性の要求の飽和に達することが出来るのでありますまいか」（5月、別府にて）。若者らしく自らの思想の純粋化を目指していることが読み取れます。

庄原に帰ると、久保正夫が京都から訪ねてきます。久保が去った後、京都の一灯園に向かう途中、お絹さんに遭い、ぐずぐずする内に6日が過ぎます。お絹さんの病院から保護願いが出て、警察沙汰になり、庄原

の両親からは「いつそお嫁に貰え」と勧めるのでした。

百三は、「今の私の心に描いてある生活はどうも結婚生活とは調和しさにありません。私は一概にお絹さんと結婚しないといふのではありません。けれど今の私はそんなことをしてはられない気がするので」と綴っています。お絹さんにこだわりのつつ、宗教思想の純化を希求している様が見て取れます。青年百三の思索の過程に惹かれつつ、私は先を急ぎます。

一灯園で数ヶ月、お絹さんも一緒に修行生活を経て、翌大正5年、病が思わしくなく転地療養に入ります。

はれがましく、私の友人に逢ふのは自分の卑しさが気にかかり、また東京は美しい女が多いところ故、私の醜さが眼に立つから行きたくありませんと云ふので困っています」と。

百三は11月、『出家とその弟子』の執筆で、弟子の1人が「愛してよかったです」というところを書きながら、涙します。お絹さんと重なるのでした。「お絹さんとも一生別れずに仲よくせうと思ひました」と久保正夫への手紙にしたためます。

お絹さんとの間に長男地三が生まれるのがこの翌大正6年3月。『出家とその弟子』の刊行、ベストセラーは同年6月。お絹さんからのひたすらな愛と、それをむげに断れない百三の葛藤は、続きます。

だが、この数年後、お絹さんを側に置いたままで大手企業社員の娘、伊吹山直子と結婚。私には百三の独りよがりが出つ走つたと思えてなりません。百三を理解するための1つのカギには違いありません。

「植物画とは何か」
 「日本の植物図譜を中心に」 (20)

松竹梅酒造株式会社社長であった野田博の強い要望で企画された「原色日本産ツツジ・シャクナゲ大図鑑(絵・太田洋愛 文・富樫誠)」は1981(昭和56)年に出版された。これは左に太田洋愛が描いたツツジ・シャクナゲの花をつけた枝の全形図を載せ、続いて浅井ひさよの花の解剖図(線画)と富樫誠の解説、生態写真、分布図が続く豪華な大冊である。これに太田洋愛は日本産ツツジ・シャクナゲ全種(54種)の図を描いている。太田洋愛はサクラ同様、ツツジ・シャクナゲの生品を正確に写生し、透明水彩絵具で丹念に彩色している。

いずれも「原色日本のラン—日本ラン科植物図譜」やこれらの図譜に植物図を描いた太田洋愛(1910~?)は愛知県渥美郡田原町に生れ、1929年、満州教育専門学校教室で、古代ハスの研究で著名な大賀一郎博士に師事して、植物画を学び、1949年旧満州より引揚げ、「原色ツツジ・シャクナゲ大図鑑」など以外に「原色図譜・園芸植物」、「花の肖像」(全3巻)など多くの著作がある。1970年「日本ボタニカル・アート協会」を創立、1981年当時出版美術家連盟会員、日本花の会特別会員であった。

日本でも植物図(植物画)が根づき、1991年には日本植物画倶楽部が創立され、年齢や経歴を問わず、植物図に関心を持つ会員で構成され、全国的な規模で交流を続けている。そして、この日本植物画倶楽部は自然に親しみ、自然を理解するための方法として植物図の可能性を追及している。2004年には75名の会員が描いた日本で絶滅が危惧されている182種を掲載した「日本の絶滅危惧植物図譜」を出版した。この図譜でオニカンアオイ(図1)ほか2種の植物図を描いている今井真理子(1942~)やヒメタニワタリなどを描いている石川美枝子(1950~)の作品は世界的な植物図蒐集家シャーレイ・シーウッズのコレクションが展示された「ヴィーナスの展覧会」の展示解説書「植物への情熱—現代植物画巨匠作品— A Passion for contemporary Botanical Masterworks」に掲載されている。

また、「植物への情熱」にサイトウマナブ(1929~)、ササキマサコ(1939~)、サトウヒロキ(1925~1998)の作品が掲載されている。そして、「植物への情熱」に掲載できなかった日本人画家としてクロダヤスコ(1950~)、ミワカズコ(1943~)、ムラカミヤスコ(1943~)、相良武子(1930~)のことを紹介している。相良武子は「日本の絶滅危惧植物図譜」でヤマシャクヤクを描いている。シャーレイ・シーウッズは1996年に「現代植物画家たち Contemporary Botanical Artists」という画集を出版している。この画集には二口善雄(1900~?)、今井真理子、コジママリコ(1937~)、オカクラミヨコ(1940~)、トヨタミチコ、内城葉子(1949~)の作品が掲載されている(図2)。今井真理子の作品は「植物への情熱」ではウツボカズラ属3種を、「現代植物画家たち」ではタマノカンアオイの図が掲載されている。また、内城葉子は「日本の絶滅危惧植物図譜」にキスミレなど3種の図を描いている。

このように多くの日本人画家がシャーレイ・シーウッズの眼に止まる程の日覚ましい活躍を展開している。大場(1996)がいうように植物図は「花の肖像画」の域に達しているといえる。

※「植物画とは何か」は今回で終了です。

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。



図1 今井眞理子の作品「オニカンアオイ」
 (「日本の絶滅危惧植物図譜」より)



図2 内城葉子の作品 (SLIPPER ORCHID: Peohiopedium)
 (CONTEMPORARY BOTANICAL ARTISTS による)

「つれづれ歌談」③⑧

松岡 初枝

若い頃、万葉集についてのテレビ番組が放送される時、講師が犬養孝先生の出演回ほど心が躍ったことはありませんでした。朗々とした歌いぶり、大和路で解説されている姿は、今も忘れられません。・東(ひんがし)の野に炎(かげろひ)の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ 柿本人麻呂

東の野に昇る朝日が炎のごとくに立ち、振り返ると月が傾く様が見える…。まさに朗々と歌うにふさわしい有名歌です。宮廷歌人らしい詠みぶりですが、当時、天武、持統帝の皇子、草壁が急死し、子の軽皇子が文武帝となりました。東の野に新帝が鮮かに出立ち、草



壁皇子が静かに去ってゆく様の比喩ですが、人の世や時代の移ろいを詠んだ歌です。

・小竹(ささ)の葉はみ山もさやに乱(さや)げどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば 柿本人麻呂

小竹の葉は山路でざわざわしている。私の心も同様、今妻と別れてきたばかりなので…。石見国(現・島根)に国司として赴任していた人麻呂は、急ぎ帰京する命で、現地妻を当地に置いて来たのです。現地妻は同伴できないという暗黙の掟があったようです。・鴨山の岩根し枕(ま)けるわれをかも知らにと妹が待ちつつあらむ 柿本人麻呂

鴨山の岩を枕に今死にそうな私。亡き妻よ待っていてくれ、すぐに行くから…(二首目の妹とは別の人です)。彼の歌を引き立ててくれた多くの人が死んでしまっただけで、宮廷歌人も次に譲ろう。彼はまた石見国の役人になったものなのでに老いの身、彼の地で死去した人麻呂。多くの歌を残した彼を、犬養孝先生は朗々とした声で慰めているのかもしれない。

「すごい、イヌノフグリだ」

突然、賢太が駐車場の電信柱の前でしゃがみ込んだ。そんなもん、めずらしくもないじゃんと聡太郎が覗き込むと、淡いピンク色のちっちゃな花が見えた。

「違うよ。青くてもっと大きな花が……」

「それはオオイヌノフグリ、イヌノフグリは日本の固有種で、絶滅危惧種になっていて数が少ないんだ」

なんだか悔しかった。

「フグリって、金玉のことなんだろう？」

賢太がニヤリと笑った。

「小さな実ができるんだけど、それが犬のフグリ……、金玉に似てるんだ」

当然のような顔で頷いたが、実のことだとは知らなかった。

「じゃあ、オオイヌノフグリの実は、でっかい犬の金玉だ！」

賢太が苦笑を浮かべた。

「そう思うよね。でも、平べったくてハートの形をしてるんだよ。外来種で、イヌノフグリと同じ種類だからそんな名前になったけど、フランスでは『聖母マリアの瞳』と呼ぶ地域もあるんだ。イギリスだと『鳥の目』、この花を摘むと鳥に目をほじ

くり出されると恐れられる縁起の悪い花なんだ……」

「詳しいな」

「僕、植物学者になりたんだ」

恥ずかしそうにそう言って、賢太が立ち上がった。中学校の入学式の帰りだった。小学校では背が低いので「マメケン」と呼ばれていたが、いつの間にか総一郎と同じぐらいになっている。黒縁の眼鏡をかけた顔

秘境駅 2

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑧3

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

が急に大人びて見えて、心がざわついた。

(おかしいな)

線路が見えなくなって、もうかなり歩いている。引き返した方がいいという声のアラームが、身体の奥から何度も聞こえてくる。

横浜にある自宅から、広島の東城町にある祖母の家まで、青春18きつ

ぷを使ったひとり旅を計画した。このままでは親友の賢太に置いていかれる。何かをしなければ駄目だと焦ったが、賢太の植物学者のような具体的な目標は何も思い浮かばない。おれは何をやりたいんだ？ 乗り物が好きで、電車の写真をかなり撮り溜めしている。

心配する両親を説得したが、大阪までは新幹線で行くという条件をつ

ると、4時16分発の東城行きはもう出てしまっている。次は6時25分発の備後落合行き、まだ1時間半以上、待たなければならぬ。これは、事前にパソコンで調べていたことだ。スマホの道路マップのアプリで、布原駅を検索した。新見の次駅である。自然の中にある秘境駅として有名だということはパソコンで知っていた。

(1時間15分か……)

歩いたときの所要時間が表示されている。改札を出て、駅舎の外に出ると、真夏の日差しがまだまぶしかった。ばあちゃんが贈ってくれたカープの赤い帽子を被り直して、総一郎は歩きだした。

芸備線の線路が見えたときはホッとした。このまま線路傍の道をたどって歩けば、布原駅に到着するはず。写真を撮りすぎて、スマホの電池残量が乏しくなっていた。

廃屋のような古びた家を前にして途方に暮れた。この家の前で、道が途切れていたのである。背後でガサガサという音がして、びっくりして振り返った。熊……、ではなく、髭面の小柄な爺さんが立っていた。「ボウス、何をしとる？」



答えることができなかった。睨まれた。色褪せた作務衣のようなものを着ているが、どこか人間離れしている。

「あの、スマホの充電をさせてもらえませんか？」

「スマホ？」

「コンセントを使わせてください」

「かまわんが、電気が止められておるんでな」

夕暮れ時が迫っていたが、家の窓に明かりはなかった。

「おまえ、迷子か？」

布原駅に行くのだと告げると、

前歯の無い歯をむきだして大笑いした。

「おいりやあせんのう。しかし、こんな山奥で迷子とは、ぼっけえ大物じゃ。よし、道がわかる処まで車で送っちゃろう」

安心したからか、急に喉の渇きを覚えた。

「何か飲む物をもらえませんか？」

爺さんが肯いて、家の前の畑で何やら採って来た。

「ヘチマですか？」

「ボウズ、キュウリを見たことがないのか？」

キュウリ？ 緑色の巨大な物体は、スーパーで売っているキュウリとは別物だった。

「まあ、食うてみい」

ボキリと半分に分けて食べた巨大なキュウリは、皮が厚くて少し青臭かったが、果物のように瑞々しくしておしかった。

「ほいじゃあ、行くか」

倉庫から引っぱり出してきたのは、ゴツゴツとした骨格の古びた自転車だった。でも、ピカピカに磨き上げている。いつの間にか、ポツンポツンと雨が落ちてきた。

駅舎も待合室も、ベンチもない

ホームに立って、赤い傘をさしていた。爺さん曰く、山下清さんが持っていた傘と同じモデルなのだという。骨が2本、折れているので、そこから雨が吹き込んでくる。

(ひどい運転だったな)

熊除けだと言って、ジリンジリンとベルを鳴らしながらデコボコの山道を猛然と下るのだ。自転車の荷台に跨って、爺さんの痩せた体にしがみついていた。太くて逞しい骨だった。

「この道をずっと辿って行くと、大雨や落石のときの通行止めの遮断機がある。その二股に分かれた道を川の方に下って行くと、駅の明かりが見えてくる」

爺さんの自転車に比べれば、人気がない夕暮れの山道も、熊さえも怖くはなかった。

風雨が強くなって、傘が飛ばされそうになった。傘をたたんで、コンクリートの上に大の字に横たわった。近くを流れる川の音が聞こえてくる。なんだか愉快的気分になって、爺さんのように歯をむき出して大笑いした。流れ込む雨水を飲みながら、キュウリの味を思い出していた。

《参考文献》「身近な雑草たちの奇跡」森昭彦著（SBクリエイティブ）

まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。(ただ今閉鎖中)
- ・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第二部 歴史事項を見る

今回から、親近感を持って頂くため、現在の新暦月に旧暦月を合わせて、即ち八月から旧暦八月の歴史事項を「南太平洋協会発行のカレンダー」に従って、解説します。

八月一日家康江戸城入城一五九〇
(天正十八)年



豊臣秀吉が全国唯一の未征服地、関東・東北を平定した。関東の北条氏を討つのに、徳川家康は多大な貢献をしたことで、家康の旧領は没収され、かわりに北条氏の旧領を与えられた。そして、武蔵の江戸城に入った。

江戸城の築城者は、太田道灌(どうかん)・父道真(どうしん)だが、道灌の名が高い。太田父子は扇谷(おぎがやつ)上杉氏に仕えており、その関東支配を助けるため、一四五七(長祿元)年に江戸城を築いた。城域は今の江戸城跡の一部に相当。それから、一六〇六(慶長十一)年(將軍秀忠)、一六三六(寛永十三)年(將軍家光)の、この二回が大きな改修であった。

※画像は「江戸図屏風」に描かれた元和度もしくは寛永度天守。

八月八日仏教興隆の詔(みことのり)六四五(大化元)年

仏教は紀元前五世紀ごろインドに興り、南アジア・東アジアの諸地域

に広まる。そして、中国大陸から朝鮮半島を経て日本に伝わってくる。わが国への仏教の伝来は百済からで、日本書紀によると五五二年としているのに対し、仏教界の古伝「元興寺縁起」などによると、五三八年のことになっており、この年を採用している。そして、大化改新の幕が切られて落された六四五(大化元)年八月に仏教興隆の詔を發布し、十師と寺司(てらのつかさ)・寺主・法頭(ほうず)を任命した。

八月二十三日白虎隊自刃一八六八
(明治元)年

白虎隊は一八六八(慶応四)年三月、会津藩の軍制改革により組織された。それは、十六、七歳の少年からなる少年隊である。会津戦争のなか、戸ノ口原で官軍に敗れ、飯盛山に退いていたが、会津若松城下が火の海となったのを見て、落城と思ひ込み、二十人が互いに刺しちがえて自決した。

八月二十五日種子島鉄砲伝来一五四三(天文十二)年

この年は、世界史の上では、コロンブスがアメリカ新大陸を発見してから五十一年目、マジエランが世界周航をしてフィリピン群島に到着してから二十二年目にあたるが、この

年一隻のポルトガル船が、シヤムから南シナの寧波(にんぱ)に向かう途中、暴風雨にあって、鹿児島大隅の種子島西村の小浦に漂着した。このとき、ポルトガル人の携帯していた小銃は、日本の室町中期のころから伝わってきた火槍などという原始的な小銃に比べて、はるかに優秀なポルトガル小銃であった。そこで、領主であった種子島時堯(ときたか)は、その小銃二挺を四千両で購入し、その用法と作り方を習わせようとした。しかし、そのポルトガル人たちは、製法などは知らなかった。

すると、翌年天文十三年に、再び南蛮船が来島した。その中に一人の鉄砲工匠がいたので、金工の八板金兵衛に命じ、製法を学ばせた。しかし、その製法の秘法を教えないので、ついに、自分の妹十七歳の処女を鉄砲工匠に提供し、ようやく、その製法を伝授された。日本でも初めて、ポルトガル式の小銃が作られるようになったのである。

鉄砲伝来は、やがて戦国大名の戦術に一大変革をもたらす。武器や武装だけでなく、城郭や建艦技術をも一変させ、ひいては従来の足輕に代わる鉄砲隊養成の必要から兵農分離を促進することになるのである。

シニア海外ボランティア・エピソード⑧

「ハゲワシの襲撃にライオン……」 周囲には危険がいっぱい！」 山崎 允まこと

「ドーン」、「バリバリ」、車の前面ガラスに蜘蛛の巣状のひびが入った！ 前方道路わきに見えていた数個の黒い物体は大きな鳥の群れで、我々が近づくと飛びはじめ、しばらくは並行して飛んでいた。すると、一匹が踵を返すようにして我々めがけて突進してきたのだ。

一瞬にして前方が見えなくなった。急ブレーキをかけた。対向車をやり過ごした。道路わきに停車し、様子を見ると、ドライバのヘンリーの前のガラスの損傷がひどい。運転することは不可能で、視察旅行をやめる決断をした。すると、農民がびつくりするほどの大きさの鳥の死骸を引きずってこちらにやって来た。足の長いハゲワシで、群れの中の一羽が自分の命を懸けて襲撃してきたのだ。

ハザードランプをつけ、徐行運転。前方の状況をヘンリーに伝えることに集中。やっこの思いでJICAに到着するや、上司や車両管理担当者

に報告を終えた。写真を念入りに撮影しているのをみて（写真参照）、証拠品を持ち帰ったのは正解だった。警察署に保険会社へ申請する「ポリス・レポート」事故証明書」をもらいに行った。

女性警官が書類を片手に現れたがペンがないので「貸して」とせがまれる。持っていた画板を下敷きにするのでそれも「貸して」、おねだりの



前兆と予感。書類の作成が終わると「この画板欲しい」とおねだりのダメ押し……。内心「いい加減にしろ！」と大声を上げたかったが日本国を代表する身であるので自分をなだめた。この国での必要経費として、納得のいかないまま筆記用具一式を手渡した。

延期していた視察旅行を後日再開した。視察の目的はカリバ湖（ザンビアとジンバブエの国境に位置し、面積は約5400km²で日本の愛知県ほど。1959年完成のアーチ式ダムで、エジプトのアスワンハイムダムに次ぐ世界第2の人造湖）。堤高128mで、湖底にある発電所の見学申込み、そしてカリバ湖畔でロッジを探し、我々の今夜の宿泊と、後日のお客様用の宿泊予約を取ることにあった。

2泊3日の視察旅行中、様々な体験をした。雨上がりで道路は排水が悪く、ボンネットがすっかり泥水につかったままの走行でまともな道路に戻るまで、ひやひやの走行だった。「小用」を足そうと車のドアを開けようとすると「ミスタ・ヤマザキ、ライオン！」とヘンリーが小声でささやいた。ライオン達の肌の色と枯れかかった樹皮の色が保護色となって、

気づかなかった。ヘンリーに命を救われた！

小さな恐怖「ツエツエ蠅」が車の中に入り込み、二人で追い出そうと奮闘した。この蠅に寄生している「トリパノソーマ」が体内に入り込むと、中枢神経系が侵され、うとうとと眠るような状態になり、最後はこんな状態になって、死に至るといふ恐ろしい蠅であった。年間3万人が死亡していると聞かれている。

やっとして視界が開けた。「海」が目の前にある！ 一瞬、日本に帰って来たど錯覚した。180度展開する水平線は海を連想させてくれた。思わずスケッチブックを開いて、鉛筆で横一線の薄い水平線を描き、芯を斜めに傾けて霞を掛けた。墨絵のつもりだった。

到着した洋風のしゃれたロッジには孔雀がいて、翼を拡げて我々を迎えてくれた。先日のハゲワシを思い出さずにはいられなかった。波は静か、水はきれいなので「泳ぎたい！」、でも淡水に生息する「ビルハルツ住血吸虫」のことを予習していた。この吸虫は人間の皮膚を食い破って体内に侵入すると発熱、肝臓、脾臓の腫大をきたし血尿、排尿困難等々の病気をもたらすらしい。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

猪垣の強電流の目に見えず

近藤 昌平

塀超えて隣家に胡瓜垂れ下がる

富久光

ふるさとの実梅の香り厨満つ

片岡 正人

過疎の村夜明けを告げるほととぎす

隆愚

戦ひはいつ終わるのか月見草

大槇 三代子

セミの声一陣の風さわやかに

寺内 龍二

草筆る懺悔ばかりの墓参かな

赤川 冬人

むし暑き梅雨の夜に煮る杏ジャム

松岡 初枝

色も香もよし心も晴るる

投稿&寄稿

候のことば

あきとなり
「秋隣」

隆愚

立秋は今年は八月八日ですが、暦の七十二候では、八月七日から八月十一日ごろを立秋の初候となっています。この頃を「涼風至」(りょう

ふういたる又はすずかぜいたる)の候といえます。

秋の気配をすぐそばに感じる、という意味の夏の季語が、秋隣。本来は、立秋に入る前までのことばですが、八月の暑いさなかに時折吹く涼風こそ、秋の最初の気配かもしれません。風の他に、朝晩の涼しさ、虫の鳴き声の変化や、草木の様子など、

少しずつ静かに秋が近づいてきます。

松が根に小草花さく秋隣 正岡子規

「漫画喫茶」 赤川仁洋

久しぶりにインターネットカフェに……いや、漫画を読みに行くのだから、漫画喫茶と呼ぶ方がしっくりくる。もう10年以上も前のことだが、隣の三次市に漫画喫茶があった頃は足繫く通っていた。今は福山市の神辺町まで行って、車で一時間半かかる。近辺にあるブックオフやリサイクルショップなどもはしごして、自分にとっては丸一日の娯楽行事だった。コロナ禍前は、読み続けている連載物の新巻目的で、三カ月に一度は通っていただろうか。

今回の神辺訪問は、2年以上の期間が空いている。車で早出して、総領、上下、府中といったものを經由して8時半頃、漫画喫茶の駐車場に到着した。会員カードを確認、入館しようとしたが、自動扉が開かない。閉館していたのである。コロナ禍を乗り切ることができなかった。

さて困った。近隣の店舗がオープンするのは10時で、それまで時間を

潰す方法が思い浮かばない。仕方なく福山の市街に向かったが、通勤時間帯の渋滞に巻き込まれてイライラ。車は田舎の乗り物である。そこで見つけた看板が健康ランド「コロナの湯」。コロナ禍がおさまって出かけたのが「コロナの湯」とは皮肉だが、天然温泉と岩盤浴でのんびりできた。

しかし、今後はどうする？ 漫画喫茶に行くのであれば、福山の中心地にある「快活クラブ」が最寄り。個室の設備や料理が好評で、全国を席巻している。今度は泊りがけで出かけるかな。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：8月19日(土) 9:30～11:30

テーマ：「竹チップを活用した地域のブランド米づくり」

講師：松田一馬氏（農事組合法人殿垣内代表理事）

場所：生活交流館（備後庄原駅隣接）

参加費：500円（学生200円、お茶菓子代込み）

申込み＆問合せ：080-3631-9125（柳井妙子）

第96回庄原市立比和自然科学博物館特別展

中村慎吾名誉館長追悼展「虫と草木と人びとと」

—比和自然科学博物館のあゆみと共に—

「広島県の自然科学の基盤を築き、自然豊かな比婆山連峰の麓
で、教育関係者と在野研究者の育成と共に、比和自然科学博
物館を育てた『中村慎吾名誉館長』の功績を代表的な研究成
果と併せて紹介します！」（ポスターより流用）

会期：7月21日(金)～11月30日(木)

場所：庄原市立比和自然科学博物館
(TEL0824-85-3005)

開館時間：9時～17時

料金：310円（中学生以下無料）

「ぐんぐん伸びよう会」

（教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ）

親の心得 赤子には肌を離すな 幼児には手を離すな
子供には眼を離すな 若者には心を離すな

先日、紀元前86年に創建され、現在、2100年以上の歴史のある埼玉県
秩父市の秩父神社に参拝してきました。そこで「子宝 子育ての虎」の彫刻師
左 甚五郎作の作品に添えられた「親の心得」を紹介いたします。



無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせてくださいね。

対象者：0歳～小学6年生

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

◇8月号をお届けしま
す。梅雨時の豪雨とそ
の後の猛暑に怖気付い
て、予定していた木次
線「油木駅」のストロー
ル（ぶらぶら散歩）は
延期させていただきます
ました。無理をすると、
しばらくダメージが残る年
齢になりました（苦笑）。
◇どら書房の店内はクーラー
がないので、天井の2台のレ
トロな扇風機に頑張っても
らっています。それだとレ
前に坐っているのが辛い
ので、自分用の扇風機を追
加。古本屋には扇風機が似
合います（はい、負け惜
しみです）。
◇年末と夏前は、本の引
き取り依頼が多い時期
です。部屋をすっきりさ
せたいのでしょ
うね。ただ今、大量の本
の整理に奮闘中！

編集後記

第263回

くunchiichi

しょうばあ九日市

出店一覧 (順不同)

- ・文屋
- ・お福
- ・郷屋
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・クラフトショップ
- ・くららおばさん
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・17KITCHEN
- ・アーミッシュ
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・とらぢ
- ・健康企画グループ
- ・さだっさ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・佐藤園芸
- ・TSUDA
- ・てしごと比和
- ・社会福祉協議会
- ・地域家族まなび場三軒茶屋



★折り紙教室開催！

創作折り紙でいろいろな形に挑戦しよう。

場所：楽笑座 時間 9：30～12：00

参加費無料

8月9日(水)

9:00～13:00



TOPICS

- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
8月8日(火)～10日(木) 10時～15時
ご縁を広げる伝筆(つてふで)作品展
- ★地域家族まなび場三軒茶屋 三茶くんちカレー販売
- ★どら書房→休憩所あります！！
- ★風龍→九日市スペシャルで餃子200円！
- ★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円

* 出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

